



# 南舞岡小だより

学校所在地 〒244-0814 横浜市戸塚区南舞岡4-15-1 (TEL823-4120,4130)

ホームページ <http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/minamimaioka/>

## パラダイムシフト

校長 平石 英一

新年度が始まって1か月。舞岡の里山の、樹々の緑の濃淡が、日に日に変わってくる様子が、なんとも心地よく目に映る頃となりました。樹木の生命力が躍動する時節を迎えたと言ってもよいでしょう。自然のリズムに呼応するように、それぞれの学年は、落ち着いた雰囲気です。228名一人ひとりの子どもたちは、日々の生活の中で、新担任や級友、あるいはなかよし班の仲間と、少しずつ関わりを深めながら、人間関係を豊かに形成しているところです。42名でスタートした1年生も、伸び伸びと学校生活を送ることができています。子どもたちは大きく成長するときを迎えています。

さて、この躍動期に大切なのは、得意でないことやまだ経験していないことにも思い切って挑戦していこうとするちょっとした勇気ではないでしょうか。一步踏み出そうとする子どもの勇気を引き出すために、私たち大人はどのように寄り添えばよいのでしょうか。

『サーカスの象』という大変興味深い話をご紹介します。サーカスで曲芸を披露する象の話です。象は、芸が終わると、足におもりのついた鎖をはめられます。そうすることで象はおとなしくなり、動かなくなるからです。しかし、象にはそのおもりを動かしたり持ち上げたりする力は十分あります。では、なぜ象は動こうとしないのでしょうか。それは、子象の時の経験の積み重ねが影響しているからです。おもりはめられた子象は、何とかして足を動かそうと努力するのですが、力がまだついていないため、自由に足を動かすことができません。ですから、成獣となっても「おもりをつけられるともう足を動かすことができないのだ」と観念してしまいます。子象の時の苦い経験が、象にあきらめの気持ちを起こさせ、それが大人になっても継続していくのです。

合わせて『ノミのジャンプ』の話もをご紹介します。自分の身体の何倍もジャンプをするノミに、透明のガラスコップをかぶせるといふ実験をした研究者がいます。この実験から判明したことは、ノミは最初何度もコップの天井にぶつかるほどジャンプをしつつも、次第にぶつからない程度にジャンプを繰り返すようになったこと、コップを外してみると、そのノミはコップの高さまでしかジャンプをしなくなったことだそうです。

私たちは、ややもすると苦手なことへの挑戦を避けたり、やってもいないのにどうせ無理だろうとあきらめたりして、サーカスの象になってしまうことがあります。また、今まで頑張ってきたのだからもう十分だと、持っている力を出し惜しんでしまうこともあります。知らず知らずのうちに、パラダイム（枠組み、範型）をつくりあげてしまい、可能性を狭めてしまいがちです。もちろん、経験則に基づく価値観の形成は大切なことです。でも、子どもの可能性は無限大。彼らを、当たり前と捉えられているパラダイムで括ってしまうのではなく、秘めた可能性に大いなる期待感をもって接することが肝要だととらえます。

平成から令和へと移り変わる時代の大きな変革期。子どもたちも、このタイミングに合わせ、新たなことに挑戦しようとする勇気を、きっと抱いているに違いありません。そして、私たちにも、新たなものの見方や考え方を取り入れようとする、パラダイムシフトが求められているのかもしれない。